

暗中模索の連続が高校時代

藤原 誠太（新28回生）

私の高校時代といえば、朝から晩までバスケットボールを中心に生活していたことを思い出します。高校受験も終わり、中学時代のバスケットボールの味が忘れられず、かと言って恐ろしいイメージを感じていた高校の部活に対して不安を持ったまま講堂にフラフラと足を向けました。

ところが、その当時は、他の部とのせめぎ合いに負けてか、講堂より狭く、天井も、梁がすぐリングの上を通っているような体育館の方がバスケット部の練習場とわかり、驚いたり、がっかりしたりで、とても『青春を打ち込んで完全燃焼』というところまでいけそうにありません。ただ、その狭い中で（おまけに床がいたるところ弱っており、クギも出

ていたことを思い出しました。）当時の先輩たちが、試合が近かったのでしょうか、力強く、汗をほとばしらせながら、ボールを追いかけて、体をぶつけあっていたことを今でも思い出します。最初、想像していた恐ろしさは、なくなつたのですが、あまり強い分でもなく、しかし望みを捨ててはいないと言つた風で、親しみを感じ、結局その日のうちに入部を決めました。

同じく新入りとして入部した五人くらいの部員を含め、確か一二名くらいは部員がいたものでした。しかし、かなり私の思いではきつい練習にも耐え、仲間も頑張つたと思つていたので、試合になると同じように!! 努力してきたチームばかりのようで、いつも

一、二回で負け続きでした。

こんなことが続き、また新入部員の大半は、他の青春の味をしめたのでしょうか。秋には、私だけ残ることになりました。さらに、もともと多かつたのが三年生で、二年生の部員は少なかつたわけです。また、当時の二年生は向学心に燃えていたのででしょうか、勉強に打ち込みたい人が次々と部を去つて、とうとう、実際に部活を行っていたのは私一人となりました。こうなると、悲しいもので、ポロな体育館すら力関係の前に、あまり借りられず、練習もままならなくなりました。

それでも私は、何かあるはずだ。春になれば新入生もくる。バスケットが根っから好きな人もくるかもしれない。そんな時、私もやめてしまったら、バスケット部はクラブとして存在しなくなり、部費だって、一度なくなつたら交渉は無理になり、今後『バスケット部のない高校』というレッテルも貼られかねない。その分岐点を私が決める立場になつてし

まい、悩んだものです。

しかし、本来、楽天家な性分なのか、プラス指向で、外に野ざらしになっていた野外のバスケットコートがあり、そこを草とりして、整地したりして、雨の日以外は、とりあえず練習しました。しかし、皮ボールは、すぐ汚れてダメになるので、ゴムボールを使つての練習が主でした。雪が降つてからは、体力をつけようと、校舎の廊下でダッシュを繰り返したり、ジャンプして、教師に注意されたり、学生に笑われた事もありました。

しかし、そのかきもあつてか、春に新入部員の公募をつのり、『自由な、全く思いのまま、部活のできるバスケット部』という、良いか悪いかわからない、いつさい、強制しない部活を全面に驅つて、七名以上の入部をみました。当時の私の心としては、何をさておいても、このまま部を、潰すわけにはいかない、多少のことは目をつぶつても……という

思ひました。そういう事でしたから、さほどその年は、強いチームにはなれませんでした。が、新しいバスケットの技術などを本から学ぶのは好きだったようで、その次の春には、素質のある部員にも恵まれたらしく、二年後でしょうか、東北大会にまで良い成績を残してくれたとの事でした。

何かと悩み、楽しみ、誘惑事の多い高校時代、これが正しいという事はないにしても自分一つ、誇れるものをつかんでおきたいものであり、私には、運よく、それが、あつたと確信しています。ひるがえつて、母校の今のバスケット部は、さて、どうなつてゐるのでしょうか。



バスケットボール練習風景(昭和54年)